

「人権の集い」第2

「命の大切さ」は生き方そのもの

「命の大切さ」と都市社会

- ・都市化が進めば単調化し、**多様性を認めない社会**に。
- ・多様性を認めない「都市」の人の考え方では、「命の大切さ」という**言葉は、空（カラ）**の言葉にしか聞こえない。

「命の大切さ」の難しさ

- ・**人は死んだら必ず死体になる**、自分もいずれそうなることをしっかりと**目を背けずにみる**。つまり、自分自身を直視しなければならない。

一つひとつがかけがえのない存在

- ・感覚の世界は一元化できないのに。一括にまとめてしまう考え方。
(命を大切にすることによって最も反する。)

多様性との出会いを大切にする

- ・「**命の大切さ**」→「**生物の多様性**」に気付かせる。
- ・感覚でとらえられるものは、**みんな違う**ものであることをどのように「身につけさせる」かを考える必要がある。

死の不可逆性を教える

- ・生きている人を殺したら二度とつくることはできない。
- ・**懐してしまったら、取り返しがつかない**。その不可逆性を教えることが必要。

生きている者にとっての死の意味

- ・人が死ぬということは、生きている人に非常に大きな影響がある。
- ・死の話や命の大切さというのは人生そのものである。

「命の大切さ」は人としての生き方そのもの

- ・教員自身が「命の大切さ」をどう思うかということが一番大事である。
- ・命の大切さの教育は、教員自身がいきいきと生きていないと意味がない。

----- 「命の大切さ」を実感させる教育の提言から-----